

国境の島・対馬を旅して

松澤 君代

対馬というと、「ツシマヤマネコ」「対州馬」「朝鮮通信使」しか思い浮かばない私でしたが、長崎歴史文化協会の長崎学講座で、「国境の島・対馬」について本馬貞夫先生（県長崎学アドバイザー）のお話を聞いて以来、この島に大いに興味を抱き、是非一度訪れてみたいと思うようになりました。そんな折、本馬先生が企画された二泊三日の対馬ツアーへのお誘いがあつたので参加すると伝え、他の方にも声をかけると、あつという間に定員に達してしまいました。本馬先生の案内による対馬の旅は、歴史好きの人々には見逃せない、大変うれしい機会でした。

県立高校の教員であつた本馬先生は、対馬高校が初任地で教鞭をとる傍ら島内の各所へ出向き、歴史や風土について研究活動されていたので、本馬先生にとって対馬は、若き日の思い出がたくさん詰まった大切な島である事を話して下さいました。

そんな本馬先生が厳選した史跡を巡つた今回のツアー。短い時間ではありましたが、対馬の魅力を堪能できる旅でした。その中から、心に残つた事柄をいくつか述べたいと思います。

●旅行初日、十月三十日午前九時三十五分、長崎空港出発。十時十分対馬空港着。対馬観光物産協会事務局長らの出迎えを受ける。

●黒瀬観音堂を拝観（黒瀬地区）。祀られている銅造如来坐像（国指定重要文化財）は韓国の統一新羅時代（九世紀）に铸造されたもの。



黒瀬観音堂の銅造如来坐像（左）と銅造菩薩坐像（右）
（写真提供：長崎県文化振興課）

馬藩は優れた外交官を抱えていた。その中の一人が雨森芳洲である。彼は「誠信の交わり」（お互いに騙さず、争わず、真心を持って交わる事）がなければ、善隣外交は成り立たないとし、朝鮮語や中国語を学び、その国の歴史・文化・民俗・風土すべてを知つたうえで朝鮮の人と交わり、そうした考えを周囲にも啓蒙した。

●和多都美神社。山幸彦と豊玉姫命を祟る海宮。本殿正面の五つの鳥居のうち二つは海中にそびえ、潮の干満によりその様相を変え、遠く神話の時代を偲ばせる。平安時代に編纂された「延喜式神名帳」に記された式内社西海道（九州）全体で九十八社一〇七座の内、対馬は九州最多の二十九社を占める。対馬は多くの神々が宿る神の島であつた。

●椎根の石屋根。対馬で産出される板状の石で屋根を葺いた高床式の倉庫。●小茂田浜神社。文永の役（一二七四年）では元・高麗軍三万三千人のうち約千人が佐須浦に上陸。迎え撃つた宗資（宗助）国以下、八十余騎が激戦の果てに全滅。その時の戦死した将士を祀る神社。現在、十一月に行われる神社の大祭では、鎧武者達がときの声をあげ、神主が海に向かつて弓を鳴らす「鳴弦の儀式」が行われている。

●早田氏の拠点、尾崎。早田氏は朝鮮・中国・東南アジアに至る広い交易圏を持ち、国境を超えて海上を移動する海洋民であつた。七百年も続く早田氏のご子孫にお会いすることができた。

●浅茅湾クルーズ。市営渡海船に乗り込み、無数の美しい入り江が続く浅茅湾の景色を楽しんだ。奈良〜平安時代にかけて対馬は真珠の産地として知られた。なかでも浅茅湾一帯は、古代より天然の真珠が採れたという。天候にも恵まれ最高のひとときであつた。

●対馬の食。穴子の刺身は絶品で、郷土料理の石焼料理、対州そば、椎茸なども格別であつた。緑豊かなので水がいいのだろう、米や酒もたいへん美味しかった。

最後になりましたが、案内して下さいました本馬先生をはじめ、行く先々で丁寧な説明をして下さいました地元観光バスの運転手さん、そして対馬市職員の方々には大変お世話になりました。この紙面をかりて、改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。また、対馬に参ります。

（長崎歴史文化協会理事）

地元では安産の守り神として信仰される女神さまで、朝鮮半島経由で伝わつたとされる。その隣に銅造菩薩坐像（市指定文化財）も安置。韓国の高麗時代末（十四世紀）に铸造された男神さまで、どこかユーモアのある表情であつた。いずれの坐像も実物はパンフレットの写真より美しかった。

●厳原のまち歩き。対馬藩主宗家の墓所がある万松院は、二代藩主・宗義成が父・義智の冥福を祈つて元和元年に建立したもの。三具足は（青銅製・祭礼用）は朝鮮国より贈られたものと伝えられ、当時、日本とは緊密な隣国同志だつた事がうかがえる。室町時代から交易を独占し続けてきた対馬と朝鮮との良好な関係を一変させたのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄慶長の役）であつた。その後、朝鮮との関係を修復したのは、初代藩主の宗義智である。国交回復からおよそ二百年の間に、十二回の朝鮮通信使が来日した。

●金田城跡（国指定特別史跡）。この城は、白村江の海戦（六六三年）に敗れた大和朝廷が、唐・新羅の侵攻に備えて築いた古代山城である。国防の為に防人と烽火が置かれた。亡命百済人の技術による朝鮮式の山城と云われ、天然の絶壁を利用して築かれており、山腹に廻らされた石塁や谷あいにある城戸・水門は超一級の遺構とのことであつた。また、万葉集の防人の歌や遣新羅使の歌から、対馬と大津京など都との間に密接な関係があつたことが分かる。

●厳原八幡宮。境内の一角にある今宮神社の祭神である。宗義智の妻（小西行長の娘でマリアと云われている）は、小西行長が関ヶ原の戦いで敗れ京都で斬首されると、義智はマリアと離縁せざるを得なかつた。マリアは長崎へ送られると間もなく死亡。対馬の人々は彼女を憐れみ、今宮神社の祭神として祀つたという。

●長寿院・雨森芳洲（儒学者）の墓所。朝鮮通信使節団との交渉の為、対

風信

○今年も余すところ後数日になりました。「今年、一番の思い出は何だつたでしょうか」と会員皆様方から良く尋ねられるのですが、「さて私は……」と答える。事務局の方々におたずねしたら「一年間、無事でよかつたのが、今年一番の思い出ですよ」と言われました。

○本会の事業としては毎週月曜日の朝十時半より毎回講師を御招きしての学習講座、毎回三十人以上の満席でした。

○そして本会の恒例の私達文化協会会員有志が協力して参りました長崎県九条会主催の「憲法をめぐ」の街あるきも今年で十二回、今年は五月四日諏訪神社・長崎公園・松ノ森神社の周辺の史跡を中心に歩かせて戴きました。参加者も多く盛会でした。

○私は恒例の事ですが本年も長崎名物の「八月お盆の精霊流し」、十月七日の「長崎くんち」のテレビ放送をさせて戴きました。今年の長崎くんちでは樺島町のコッコデショが有名でしたが、紺屋町奉納の藤間先生御指導の本踊には長崎くんち伝統の風雅でおごそかなものが感じさせられました。

○次に先月末、本会の小川会長より御通知がありましたように、「高齢のため今年度末をもって理事長を退任し長崎歴史文協会を閉会したい」と申し出たことより「平成三十一年三月三十一日をもちまして本会活動を終了することになりましたので御了承された上、最後の三ヶ月を無事に過ごさせたく思いおりますので、御願い申し上げます。最後に皆様、何がともあれ良き新年をお迎え下さいませ。」

○今月ご寄贈いただいた書籍

一、宮川雅一氏（長崎近代文化遺産研究会会長）「長崎県近代化産業遺産めぐり『夢の遺産』石炭・造船・防衛」第一章の石炭産業のもたらした日本の近代化に始まっている。（企画担当・菊森淳文、発行・長崎新聞社、一、八〇〇＋税）

一、新時代の先声 長崎孔子廟中国歴代博物館より受贈 北京出版社

一、松尾龍之介氏より自著の「踏み絵とガリバー」を戴きました。ガリバー旅行記に「踏み絵の話」が載せてあるのを御存知でしたか。（弦書房刊（福岡）

一、九〇〇円＋税）

一、佐世保史談会より「談林58」を戴きました。「郷土史はオモシロイ」の三論あり、楽しく読ませて戴きました。（佐世保史談会発刊）

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 五四〇

十八銀行旧公会堂前出張所2F

